

TOPICS

堂島・北新地って どんなところ？

今から1400年以上前の四天王寺創建時に資材を乗せた船が暴風雨で難破、堂島川と曾根崎川(堂島川の北側を流れる川で、蜷川とも呼ばれていた)に挟まれた洲(島)に漂着、その資材でお堂を建て、お堂のある島「堂島」が地名の由来とされています。

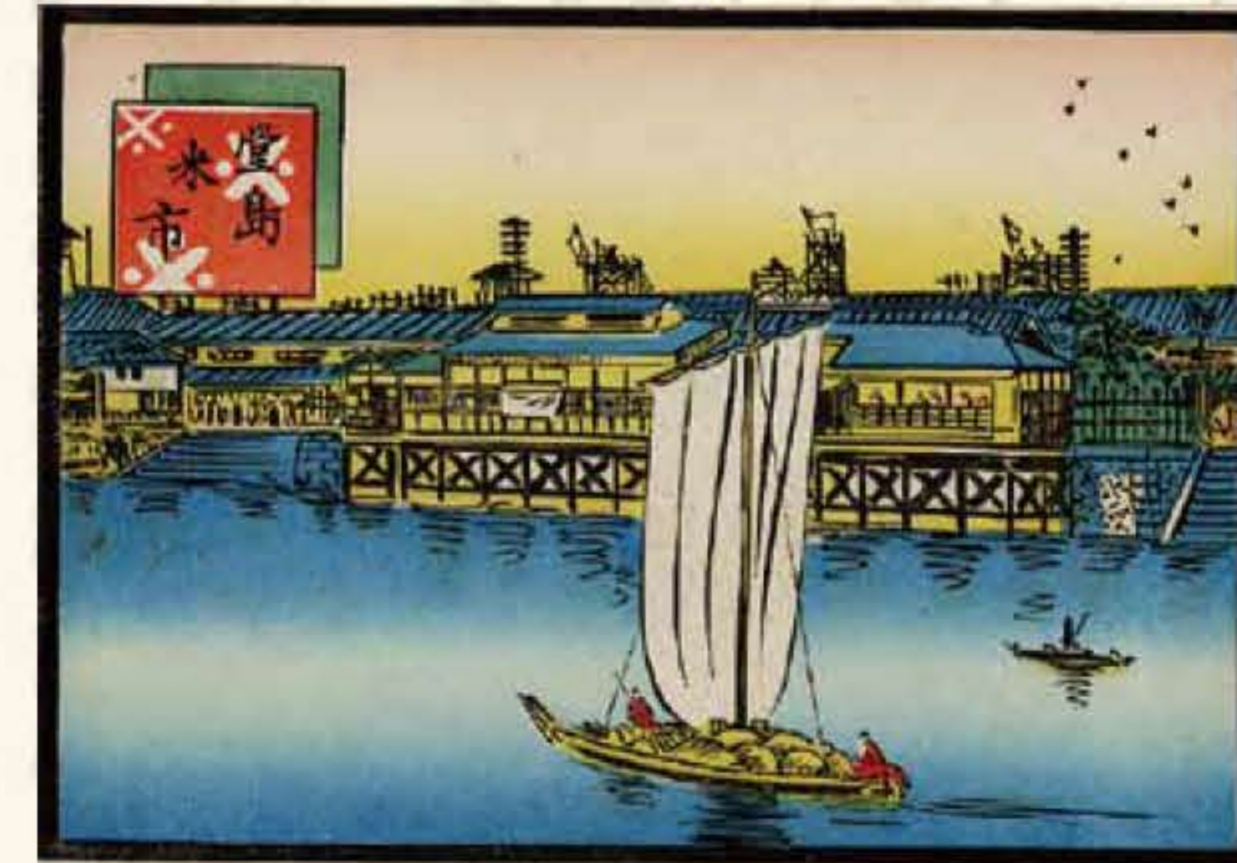
江戸期になると豪商淀屋が私費で架けた「淀屋橋」の南詰に米市が立ち、元禄時代には堂島新地に移され、以前から堂島新地にあった茶屋の多くが曾根崎新地に移転し、堂島は商業の地として、曾根崎新地は遊所の地として発展しました。江戸中期には堂島は幕府公認の全国の米相場の元方となり、諸藩の蔵屋敷も立ち並んだ、曾根崎新地は裕福な米商や、諸藩の武家も安心安全に遊べる、格式の高い日本初の公許の遊所地として賑わいました。

明治に入っても堂島の米市場は「大阪堂島米穀取引所」として発展を遂げ1939年まで続きました。

1909年に「天満焼け」と言われる大火災によって、堂島と曾根崎の多くが消失し、その瓦礫で曾根崎川も埋め立てられ、堂島新地と曾根崎新地は地続きとなり堂島・北新地となりました。再建された北新地は、大大阪時代、堂島川沿いには日本の産業を代表する企業が集まり、北側は財界の発展と共に社用族が遊ぶ花街として繁栄します。西側には、大阪商業会議所(今の大阪商工会議所)、中心部には毎日新聞社の社屋が建ち、大阪を代表する産業、メディア、遊興の街となりました。

太平洋戦争では、街のほとんどを焼失しましたが、戦後堂島は大阪経済の中心地として復興し、北新地は高級クラブや料亭が立ち並び「夜の商工会議所」として東京の銀座と並ぶ高級歓楽街として発展しました。

バブル崩壊後には社用族の減少と共に、北新地にも多様な業態の店舗が進出しますが、1997年にはJR北新地駅の開業、大阪経済の中心という立地と、歴史に裏付けられた高級な遊興の街のイメージは、人々にステイタスやあこがれを今も与え続けています。



堂島米市場 錦絵



北新地昭和初期



昭和33年の堂島中町

古今絶無
驚天動地
大阪大火災實況圖

凡例